

# オリーブの樹

第132号

2015年11月8日

شجرة الزيتون

早期积放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！

本名に  
帰る  
罪を  
ゆきたり  
8  
逮捕  
記念  
白



## 目次

- P 2 9月10月の歌 重信房子
- P 3 独居より 重信房子
- P13 読んだ本 重信房子
- P17 「イスラーム国」と宗派戦争（下） 重信房子

重信房子さんを支える会

# 九月十月の歌

重信 房子

戦争は廊下の向こうに立つどころか平和のふりして目の前に居る  
 逝きし人白き茶の花共に摘みし眩めく浮かぶ幼き日のこと  
 萩尾花十六夜月の光に濡れ遠い記憶の扉を開く  
 臨海を越え 進 る血の叫び強いられて立つインティファダ  
 囚徒らの去りし喧騒運動会日陰る芝生に掠鳥遊ぶ  
 戦争法仕切り直しの10・19諦念に勝る憤怒新たに  
 サムアップ掲げし日より十五年古希を生きたり逮捕記念日



独居より 9月7日～10月28日

## 「シリア問題」は「ウクライナ問題」と連動しています

重信 房子

9月7日 昨日は、新宿で「SEALDS」の学生たちと「安保関連法案に反対する学者の会」が共催で、伊勢丹前で反対行動。1万2千人集まったとのこと。68年の新宿の反戦闘争を思い出しています。69年の10・21も「騒乱」と言われた学生、群衆混然一体となった闘いでした。そんなことを思い返しつつ、記事を読んでいます。

創価学会も10本以上旗をなびかせ、公明党の現方針に反対して加わっているとのこと。しかし、安倍内閣は強行採決の機をうかがい、人びとの声をくみ上げる考えはありません。

「朝日歌壇」にもたくさん詠まれています。“総理大臣からその国を守らねばならないといふこの国の危機”“丁寧に説明する程「支持する」が「しない」を越える今朝の新聞”

今日は房の引越しがありました。窓の小さい前のところに戻り、空が小さくて残念です。入浴後、引越し準備中に、あ！ぎっくり腰。ちょっと油断した自分のせいですが。痛みで歩みもソロソロと……。若くはないんだと身体が訴えているようです。

宮崎先生のいう長編マンガ「小さな恋のものがたり」は、日本に居たら機会があったかもしれませんが、読んだことはありません。先生の句は「小恋賛句」の数々です。“何時までも尽きぬチッチの片思い” “三代にわたり読み継ぐ愛読者” 作者の名は知っています。宮崎先生の著書の挿絵も描いておられましたね。お知り合いなのですね。楽しそうに。

9月8日 雨続き、腰痛もひどい……。

この間の「五輪騒動」は、権威主義、無責任、同調圧力と、何と日本の現状を示していることでしょうか。オリンピックを「国威発揚」に乗り出した安倍発言「アンダーコントロール」にはじまり、オリンピック委メンバーに森、武藤らをリーダーとした時から、政治家、官僚たちと企業一体の行事と化していました。施設も、その象徴のように派出で、金ばかり喰う代物で、専門家や市民の声も無視。あまりの予算膨らみに世論が広がると「戦争法案」の逆風を小さくすべく白紙に戻したけれど、責任所在も不

明な無責任が露呈。「エンブレム問題」も同じパターン、しかも作品より佐野氏へのこれでもかという人格批判の無責任な同調圧力。オリンピックより脱原発、フクシマにこそ税金をかけてほしいのが国民の願いでしょうに。“五輪騒動”から、少なくとも「国」ではなく、民、市民交流のオリンピックに転換しなければ救いがないと思います。金儲けと国威発揚排外主義の国家主義を「オリンピック準備」の名で、青少年動員システムとしてつくらせないように！と願わずにいられません。

9月9日 台風接近で、昨日から今日も大雨です。点呼の夕方から青空が広がりはじめました。

主治医の診察もありました。腰痛の原因を、骨密度など調べることはできないとのことですが、骨粗鬆症の年齢でもあるようです。腰痛も今日はもう大分よくなりました。CVポートをフラッシュして終了。

また、Tさん、手紙（プリントは未交付）では、8月6日能勢で200人近く集まって、超党派の反戦集会が行われたとのこと。次は13日とか。友人たちの魔案めざす行動に一杯励まされています。

9月11日 からりと青空。すっかり快晴。新聞では鬼怒川決壊の大惨事を伝えています。ここ八王子でも大雨で、十数万人に一時避難勧告が出ていましたが、台風一過の秋晴れです。でも今日は、教育日（金）で、運動は室内のみです。

今日は9・11、あの新しい「千年紀」が、米ブッシュ政権の対応「これは戦争だ！」と「犯罪・司法」に委ねず世界を戦場にしたこと一で、中東にとりかえしのつかない戦乱を広げ長びかせ、民衆の難民化を世界に広げてしまっています。

ちょうど「世界10月号」に「ウサーマ・ビン・ラーディンの殺害」シーモア・ハーシュ（ジャーナリスト）の調査報道が載っていて、十分腑に落ちる内容でした。だって、パキスタンのアボタバードに居て、パキスタン側が知らないとか、水葬にするというのも事実隠しだろうなと思っていましたから。

実は、「とび入り」のパキスタン軍諜報将校が、イスラマバードの米大使館に報奨金2500万ドルが欲しくて、タレこんだのが発端だったとか。密告者とその家族は、その後パキスタンから秘密に出国し、ワシントン近郊に住んで、CIAのコンサルタントになっているとのこと。その密告から「ビン・ラーディン」は、2001年から2006年、妻子共にヒンドゥークシ山中に潜伏していたが、パキスタン統合情報総局 (ISI) が、部族の何人かを買収して裏切らせ拘束。以来、扶養監視していた」という事実をCIAはそれで知る。そして、共同で (シナリオでは、パキスタン側は知らなかったことにして) 攻撃殺害し、「国境沿いのヒンドゥークシ山脈のアフガン側で、ドローン攻撃により殺されたことがDNA分析で、少なくとも7日間後に発表される」はずだったとのこと。ところが、襲撃時、2機のうち、ブラックホークの1機が敷地の壁の内側に墜落。乗員の多くが負傷。証拠隠滅に炎上させつつ、重篤な病人のビン・ラーディンを問答無用に殺害。死体はこわれてぐちゃぐちゃ。一機で二機分の人員がアフガンへ帰還にぎゅうぎゅう詰めで、飛行中ビン・ラーディンの遺体の一部は捨てられたらしい。墜落したヘリコプター (のおかげ) を口実に、パキスタンとの約束を破ってすぐ公表。「ペンタゴンの誰かがやる前に舞台の真ん中に躍り出る必要があった」。約5時間後のオバマの急ごしらえの「ビン・ラーディン殺害」の演説のために、その後、つじつま合わせの大混乱に陥った様子まで、大変詳しく論理的に報告されています。ハーシュは、身の危険を感じたり「精神的不安定者」などと妨害され、「ゼロ・ダーク・サーティ」で「事



実」は、ぬりかえられたような映画に出会い、3年かかってリサーチから導き出したレポートです。中東で活動していた者として、米CIAの常套手段の集大成として実感しつつ読みました。

9月13日 この日は「オスロ合意」が、9月10日「PLO・イスラエル相互承認」を経て、9月13日、ホワイトハウスでクリントンの仲介のもと、イスラエル・ラビン首相とパレスチナ・アラファト議長が調印式を行った日。あれは1993年のこと。インティファダを終わらせるために企てられたこの「合意」うまくいくはずはなく、ファタハ主流がパレスチナに帰還して居住を得、パレスチナ自治区に君臨する機会になったが、その分、占領下インティファダの民主的な指導層は、結局排除されてしまった。ハナン・アシュラウイ女史らは、今では野党でありパレスチナ外交団にも知らせずの、いきなりの「オスロ合意」と、その内容を強く批判しています。

80年代、様々な過ちの中でファタハも分裂し、湾岸戦争では反アサドから「サダムフセイン支持」にまわって、サウジ・湾岸諸国からの資金も絶たれた起死回生の「オスロ合意」にむかったアラファト議長の独走独断。当時ファタハ内外からの反対した通りの現状となって、パレスチナは「自治」状態はイスラエル支配下のまま。当時から「オスロ合意」の文でもイスラエルは「占領地」を「係争地域」(つまり双方が主権を有する)、「自治」も「オートノミー」でなく「セルフ・ルール」と、入植地を維持するための呼び方など「77年キャンプデービッド合意より後退した内容に何故合意したのか!? 第二のナクバだ!」と激しい民族的対立でした。

そんなことをとらえ返しながら「和平交渉の今も続いている欺瞞」について記してみようと思っています。

洪水大惨事の常総市。友人の住む守谷市は大丈夫でしょうか……。

9月14日「積極的平和主義」を叫ぶなら「日本がまず2万人難民受け入れます」というのが世界も喜ぶ、ということを安倍に誰か教えてほしいです。難民の欧州流入問題が日毎に拡大して、ハンガリー右派政権の排外主義・差別主義的な対応がひどいです。でも、アラブの金満国家サウジ、カタールらは、

ヨルダンに難民キャンプを作らせて、少しの援助はしても国内に受け入れません。労働力不足で、パキスタン人はサウジでは150万を超える数流入しているのに、シリア・イラク難民には門を閉じています。王政批判勢力に育つのが恐ろしいのでしょう。「アラブの大義」や「抑圧されたシリア人支援」「スンナ派支持」と言って、大量の武器を与え、反アサド勢力に介入する彼らの正体は、そこに示されています。

大下さんは、情況編集長の仕事をさしおいて、国会前で戦争法案に抗議ハンストする若い友人たちのために駆け回っていたとのこと。お便り感謝。高原さんの消息も伝えてくれてありがとう。いろいろ原稿のやりとりは難しいですが、なんとか続けます。

また、宮崎先生のお便りに、こんな風なニュースが記されています。「思いがけず、突然、大内義男君から連絡があり、今年74才になられた由ですが、最近医師から『膀胱がんで余命あと半年です、と言われ、是非先生とお話ししたくなりました。あの学園紛争で最後に妥結を決断したのは、私一人の考えでしたことで、大学のことを思っていたのです…』」などと話されていました」とのこと。あの67年の「明大二・二協定」の中、執委員長の内大さんと、学生部長だった宮崎先生が非公式に話し合っていたことは、宮崎先生の著書にも記されていました。土曜会の友人たち、機会があったら様々なことを超えて、一度大内さんと語り合ったらいいのに……と思っています。明大闘争の記録のためにも。

9月15日 見下ろす庭の萩に花がつきはじめました。遠めなのですが、四方八方に伸びた萩の枝が、ほんのりと濃い桃色に染まるのが、徐々に増えています。何とも楽しい風情です。

今、「フォーリンアフェアーズ」受け取りました。感謝。読みたい中東の論文、「イラン合意」に対する反応、「現在の国際環境から考えれば、まともな合意内容だとみなせるだろう」とか、「イスラエルは、中東でのイランの活動を制約しなかったことなど、不満をのべているが、合意拒否ではなく包括的な代替路線を考えるべき」「核合意後の新中東安全保障構造を。湾岸協力会議 (GCC、サウジら) とイランの対話を」など、米外交政策の方向を示す論文が多い。オバマ政策に肯定的評価をしつつ、戦略的岐路にたっている様子がわかります。もちろん、イスラエル

安全保障第一主義の米の政策の基本は不動ながら、反ISへのシフトを強めようとする論調が多いです。送って下さってありがとうございます。

9月17日 夕方、スポットニュースで「安保法案を審議していた参院特別委員会が、自民、公明、次世代の党などの賛成多数で可決。今日、本会議に緊急上程される。野党5党は抗議し、緊迫している」とのこと。憲法違反の戦争法案を、立憲主義破壊の憲法違反で強行。クーデターといえる暴挙。強行採決の上、国連演説のため、ニューヨークに発ち、米国の同盟国を誇ろうとする考え。何と恥ずかしくまた、強権な安倍。(国連演説で難民受け入れをこそ語るべきなのに!) 人々の怒りは決して衰えることはないでしょう。

9月18日 晴天に萩の花が美しく、心が和みます。国会前の抗議の広がりから連帯。新聞に17日午後4時30分の参議院特別委の採決に「徹底抗議!」の声。そこに明大の「オール明治の会」(教授、学生、OB1000人以上)も参加していると知り、うれしくなりました。「オール明治の会」の法案反対の趣意書は、Yさんから送られていたので知っています。私も一員として連帯!

9月20日 19日未明、戦争法案は成立してしまったようです。今、19日夕刊と20日朝刊を読みながら、こんなに熟慮すべき10の法律を力で押し切ったのだ……と改めて読み返しています。「戦後防衛政策の大転換」「集団的自衛権法制化」「世論置き去り」、見出しにも怒りがわきます。でも、これで終わりじゃない!と、多くの声、ことに「憲法違反」を法廷で問う闘い、加えて共産党からの「統一候補で自民党に選挙で勝ちぬこう」という申し出。本当に……反共の民主党も一致協力したら、小選挙区でも逆転できるのに。分断工作に目先の利益で腰砕けが見える民主党がネック。戦争法案に本音賛成の民主党議員もいることだし……。でも世論、運動の拡がりを持続が新しい局面を拓くと期待したい。

9月24日 久しぶりに運動場に出ると、走り出すとすぐ風がキンモクセイを運んできました。ああ、もうキンモクセイが咲いている! それに、ムクゲの返り花が六つもてっぺんに咲き、まわりの萩の花は、

まっさかりの濃い藤紫色になって、大きなぼんぼりのように十株ほど咲き誇っています。

運動の直後、久しぶりの姉の面会。面会に行く廊下からは、キンモクセイが盛りです。姉も体調はよくない様子。70歳代になると、これまで通りにはなかなかいかないわねえ、などと話していました。

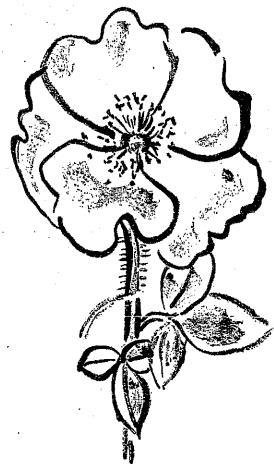
来週は9・28第一次インティファダのパレスチナ。パレスチナの現在はどうなっているのでしょうか。

そしてまた、私も古希の9月です。それから10月は土曜会。戦争法案反対に尽くした友人たちが語り合うことでしょう。

9月25日 連休が明けたら待っていたように雨や曇天がはじまったよう。昨日のグラウンドの晴れやかさから夕方からは雨模様。夜来の雨で水たまりのグラウンドが見えます。

今日は午後茶道があり、先生の宅の庭から手折ってきた秋明菊の白が飾られています。少し離れてみるとコスモスのようです。おいしい抹茶にスッカリ。

「オリーブの樹」131号も着きました。表紙の風鈴のこんな絵が好きです。今回「書評」と『イスラーム国』と宗派戦争も掲載して下さったので、ページが増え大変だったと思います。編集室の方々感謝。扉を繰ると夏の歌の下にゴーヤの絵、いいなあ……歌を引きたてて下さっています。蟬の抜け殻もカマキリもまねて私も描いてみましたが、この竜子さんの絵のようにはいきません。筆使い、カマキリのひげの極細、昆虫の足、胴体と微妙に筆の線の幅がちがう。これがプロの絵ですね。私のはどれも筆運びが同じでまったく立体感が出ません。なつかし



いおしろい花。行水のたらいの水をかけた幼い日思い出しつつの花の絵。鈴なりのミニトマトもみごと！活字ばかりの読みづらい「オリーブの樹」を和ませてくれます。日記も書評も『イスラーム国』と宗派戦争も同年輩の方々には字が小さくて読みにくいかもしれませんが是非読んで頂きたいと思っています。自分で書いたものなのですが読み返しつつ、反省や元氣や共感を得つつまた書こう！と気持ちを奮い立たせています。でも、友人たちの活動や暮らしのこと、心情や短歌、句も載ってほしいなあと思っています。

宮崎先生本ありがとうございます。来週受けとれます。今回の句は「安保法強行採決」「誰にでも違憲と判る安保法」「鳥をば今度も驚と言ひ張って」「他衛をば集団「自衛」といいくるめ」「無理通し道理引込む安保法」もっとあります！憤りがほとばしるような句です。意気高き師です。感謝。

9月27日 曇か雨空、夕方に晴れて中秋の名月が雲の間から夜7時頃にくっきり見えています。60代最後の夜、作業の手を止めて十五夜を仰ぎ祈りました。

“十五夜の名月仰ぎ六十代最後の夜に感謝して眠る”

9月28日 朝「今日是指名医歯科の先生がみえます」との知らせ。朝のベランダ体操のあと診察室へ。ここ八王子の歯科から歯周病の奥歯2本を抜歯した方が良いと言われ「今後の義歯の設計もあるでしょうから、指名医に抜く前に診察してもらいなさい」と言われていたためです。指名医は「もう少し抜かなくても大丈夫でしょう」と、抜歯後のために歯の型取りなどをしました。

四方田先生上海からのお便り感謝。上海の大学の仕事。巨大ビルの狭間に木造の小さな二階家があり、1924年の木造で毛沢東一家が住んでいた家とのこと。10月には台北で「戦争と映画」のシンポジウム、李香蘭、慰安婦、パレスチナの話を予定しているとのこと。もうすっかりかつての手術は忘れたようなフィールドワーク中です。御自愛下さい。

窓の外には萩とすすきが。今日の「スーパームーン」地球との距離が最短になるので少し大きく見えるフルムーン。何か嬉しいバースデイです。夕間暮れの紫が急速に暗くなりました。もう少ししたら窓

の外に満月が見える天気です。

ちょうどバースデイに合わせてKさんよりお便り、誕生祝ありがとう。カーディガンなどは残念ながら入りません！夕暮れと共に受け取りました。Kくんももう先に古希入りしたのですね。私の「古希組」新入り歓迎とのこと。「55年45年ぶりの運動の盛り上がりは凄いですね。過去の闘いを根本的に凌駕する質が早くも現れていますね。この幅の広さと深さにわが古希組がどのような役回りがあるか研究の要ありですね。互いに体調を整えもう一踏ん張り、二踏ん張りしていきましょう」との励ましを含めて祝ってくれて感謝！本当にいつのまにか古希……！

T子さんからもありがとうございます！同い年69年からの旧友です。Tさんはもう少し後に古希組入りですね。背柱管狭窄は手術で完全に治りましたか？また働いているのは凄いですね。多忙の中誕生日に御夫婦で気付かって下さってありがとうございます！

27日のインティファダ15周年パレスチナ連帯集会に行くとのこと、どんなでしたか？映像もトークも聴きたいです。「強さと優しさに」(冤罪布川事件の桜井昌司さんの「獄中詩集壁のうた」より)の詩を送って下さってありがとうございます。

Kさんからもちょうど見はるかす彼岸花の写真のプレゼントを受け取りました！とてもステキです。「あまりにもひどい政治家にやはり『NO』を言い続けねば！」と書いておられます。ありがとう。

パレスチナでは、インティファダの記念日の今日「和平合意」の名によって抑圧、弾圧されてきた正当な反占領抵抗運動を復権させようと多くの人々が闘っているはず。「オスロ合意」の時に反対した誰もが危惧した通り、イスラエルはただインティファダを終わらせるために「暫定合意」の名で「暫定」を「永久」化することを狙い、今もイスラエルとパレスチナ自治政府治安部隊の共同による弾圧は続いているようです。パレスチナの局面打開はもう一度「オスロ合意」のもっと前の中東和平会議の「国際化」と「包括的和平」に戻さなければ。唯一つも譲らないイスラエルの要求を受け入れるべしという米・イスラエルの脅しに自治政府が服することのみ求め続けられるでしょう。かつてハーフェズ・アサド大統領が言っていたのを思い出します。「ゴラン高原はシリア領だということ、南部レバノンレバノン領だということは誰でも知っている疑いない事実

だ。しかしパレスチナは「係争地」という言い方をされてきた。だからパレスチナ問題は占領地を取り戻すために包括的な和平の中でしか解決されない」と。

自分の誕生日はパレスチナ連帯と9・28インティファダでつながっています。そしてまた定命までの間にやれることをと心新たに誓う70才の誕生日です。みんなに感謝します。ありがとうございます。今日はキンモクセイがずっと匂っています。スーパーフルムーン見ました！「大きい」と主観が予測してみた分、あまり大きくはなかったけど濃い卵の黄身みたいにくっきり少しねっとり感の満月！なんだか嬉しい。

9月29日 快晴に今日は私の布団干しの番です。もう陽に干しても膨らまない程ペチャンコですが、それでも干した後は気持ちが良いですね。

米澤さんお便り感謝。「戦後70年のせいもあり正月からキンカン行動やXバンドレーダー反対闘争プラス『語り』が入り大変でした。」闘うとまた広がりつつけるのですね。沖縄の抗議行動に参加して学ぼうとしたら、米澤さんが来ていたのを知った沖縄市民センターのお母さん方が講演会を開こうとまた招かれてヒロシマについて語りました。そうしたら参加した社大党の女性参議員や古謝美沙子さんらが「語り」を聴いて感動され、満員で民謡を三線で歌って下さったり、広がりやがヒロシマとオキナワを一つにつないでいるのが実感できます。沖縄でヒロシマを語ることがどんなに大切な、とくに沖縄の若い世代と広島若き世代が広がり合うのは日本の希望ですね！

京都でも宇治でも300人超えるデモ！「80才を超えてから年並みに体力は落ちていますが、あと10年は運動参加を続けていきたいと思っています。房子さんも病に打ち勝ち、ともに腕を組んで進めるよう挑戦してください」と励まされています。頑張りたいですよ！ありがとうございます！

9月30日 あっという間に九月尽です。今日午後は彼岸法要。数珠が各人に配られ、焼香の仕方を教えて下さったのが良かったです。3月の法要で感想文の中にそれが希望として書かれていたとのこと。今日は快晴の気持ち良い秋。気持ち改めるのに法要はいいですよ。

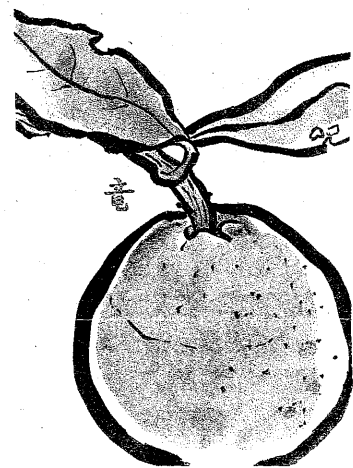


Yさんありがとう！多忙の中。「安保法案に反対するオール明治の会」主催の8・30シンポジウムいいですね。200人参加で法学部教授の基調から教員、職員、学生、OBのスピーチ。「土曜会」からは土屋源太郎さんの「砂川判決と安保法制」、紹介含めて米田さんが発言。

その後の8・30国会10万人全国100万人大行動の様子がすごい！土曜会も幟を更に倍の大きさに新しくして特製！なかなかいい！クラケンありがとう！土曜会の旗朝日新聞にも小さく出てたね!!それに呪殺祈祷僧団結成！呪殺祈祷会「死者が裁く」これもすごい！JKS47(正式名:呪殺祈祷僧団四十七士)「死者が裁く」とは近代化悪潮流としての生者のエゴイズムを糾弾して死者との共存、共生、共闘を唱えた上原専祿の言葉からとのこと。活動は戦争法案廃案！安倍政権退陣！原発再稼働阻止！売国奴に死者の裁きを！根本の安保条約、日米地位協定を廃棄することが最大の眼目とのこと。もちろん土曜会の我々がN和尚はその一員。経産省前テント広場の祈祷会の写真、サックス・太鼓・読経何かすごくない?! こういうのはいい！福島泰樹さんら同世代の方々もいます。

10月1日 今朝採血し、午後の診察で血液検査の結果を伝えられました。腫瘍マーカーは正常範囲におさまっていました。CEA5.0で、上がると異常値でしたが、3.9まで下がりました。ホッとしています。

久しぶりの快晴に、運動もグラウンドです。13日が運動会なので、トラックに土盛りしたり調整中のグラウンドです。やはり風に乗ってキンモクセイ



の香りが気持ち良い。萩の花も散り始めています。気持ちよく汗をかきました。

新聞では、シリア内戦にアサド政権側の要請を受けて、ロシア軍がIS、ヌスラ戦線への空爆開始とのこと。それほどアサド政権の軍事的劣勢だったのでしょうか。3月以来、サウジ・サンマール王とトルコ・エルドアンが合意し、ヌスラ戦線を支援しながら、アサド政権を追いつめるために総攻撃をかけていました。「国民連合」議長の本ジャハ、ヌスラ戦線と自由シリア軍の連携、米国の支援で、サウジ・ヨルダンでの訓練と、新しい対空ミサイルの援助など、大ぴらに6月1日、朝日のインタビューに語っていました。

シリア政府軍にとって戦略的なダマスカスからタルトゥース(ロシア海軍補給地)や、ラタキア(アサド政権の出身地域)に向かう道路を確保するために、第一撃を9月30日に行ったようです。「シリア問題」は「ウクライナ問題」と連動しています。「アサド政権が国民に信頼されている」という現実をふまえて、IS掃討の大義をもって、ロシアは行動を開始したようです。日本やアメリカの報道と違って、中東の多くの民衆は歓迎しているはず。アサド政権打倒を第一とするのか、ISを打倒するのが先か、米・仏・ドイツ・サウジ・カタール・トルコらに問う政治展開でもあります。

米欧は「ウクライナ問題」と共に戦略を定めねばなりません。ブッシュ子政権なら、たちまち第三次的な戦争の拡大ですが、オバマはどうするのでしょうか。「当面政治解決不可」とみて、ロシアは大胆に戦略展開しました。新たな流動は、中東地域の住民にとっては更に過酷な現実です。そしてロシア軍の参戦は、パレスチナでも占領地解放の闘いを活性化させるでしょう。

占領者イスラエル当局は、再び「自衛」の名で過剰弾圧を繰り返すのが目にみえています。アッバス・パレスチナ自治政府大統領は「オスロ合意に拘束されない」と、国連総会で公言。はじめから、アラファトラが意図したこと、イスラエル側が「オスロ合意」で公言していたことは、もともと違っていて、イスラエルは西岸入植地、戦略的な水源など、返す考えはありませんでした。

1947年のパレスチナ国家分割案決議181のパレスチナの国43.5%も認めず、オスロ合意ではパレスチナの22%で合意したにもかかわらず、

ネゲブ砂漠の土地に同等の広さの土地を与えるから、西岸の要所は返さない、とイスラエル。「暫定」はいつでも「永久」とするもよしとし、分離壁を将来の国境として、パレスチナの土地に食い込んで建設しながら、東エルサレムのパレスチナが首都と考える場に住民を追放してきました。

ブッシュ子のイラク侵略以降、米国は極端な親イスラエル政策で、イスラエルは米国に対して強気のまま、イスラエルロビーは、米政界を牛耳ってしまっただけです。混乱の中東で、もっとも基本的なこと「イスラエル占領問題」から目をそらせる動きが数々あります。だからこそ闘いで、包括的な占領問題解決に、戦略を変換することこそ、アラブ側からつくり出す時なのです。新たな流動の中からそれを期したいです。

10月2日 宮崎先生、本感謝。「小さな恋のものがたり」は、ほのぼのと私たちの時代にも通じる日常やときめきがいいですね。今の中学・高校生も通じるのですね。お母さんがとってもリアルで、楽しく読みました。感謝。それから平岩弓枝の物語も楽しく読みました。ありがとうございます。先生は「オール明治の会」知っていますか？(ネットで見られます。又「土曜会」のことも山中さんのブログで読めます)戦争法案反対は、まだこれからも続くようですね。先生の俳句のように！ご自愛を。

キューピットおばちゃん、ありがとう！祝バースデイと「オリーブの会」で勝ったパレスチナの絵ハガキを送っていただきました。そちらこそ健康で！義兄の癌は再発なく、大丈夫ですか？

安倍首相は、難民を受け入れていない日本への批判をかわすために「シリアなど難民支援に970億円拠出」と大盤振舞いのそぶり。何だか、サウジ・カタールが国境を閉ざし、難民を受け入れず、武器と難民にも金で解決するのがダブって浮かびます。難民2万人くらい、日本で受け入れることを私は提唱したい。各県で難民を支えるシステムを作ってこそ、難民に学び海外の実情を知り、人と人とが触れ合い、日本の国際化を社会の中に育てられるからです。

10月4日 日曜日の青い澄んだ空。西浦クーン！今日が命日だね。どうしていますか!?!と、彼岸に心で呼びかけています。一周忌はきっと友人たちが

万起子さんを囲んで再会し献杯したことでしょう。戦争法案、あんなに大多数の反対の中、通ったこと、川内原発再稼働したこと、怒りつつ伝えたことでしょう。萩の花をみつめつつ合掌しています。

10月5日 朝、ペランダで運動時間、処遇課の担当官がみえて、今月から優遇処遇が上がって、3類になったことを伝えられました。傍らで聞いていた患者仲間が「おめでとう！よかったね！お菓子が食べられるよ！」と教えてくれました。労働していないので、4類のまま、上がることはないと思っていました。ことに刑務所から病気でここに入院して来る人たちは、長くなると一段下がるのが普通だとのこと。房に戻って、「所内生活の心得」を読んでみると、3類になると、面会は月3回(これまで月2回)嗜好品月1回購入可、室内装飾に花を飾ってもよい、座布団可、サンダルの私物使用可、とあります。懲役になると、普通半年から1年以内に3類になるようです。働けない病人だけど、ちょうど八王子に来て9月29日で5年目。それで3類に上げてくれたのでしょうか。優遇処遇の統治システムにのせられているわけですが、やっぱり嬉しくなるものです。早く一度花を飾ってみたいのと、丸椅子で痛いお尻のところに、座布団が使えるのは嬉しいです。

デジカメ歌人から秋分のお便り。秋の空をバックに黄色の花。「菊が芋を持つ故に“キクイモ”です。愛想もクソありません」と。でも、すっきりときれいな花。「さらに右へ大きく舵を切ろうとしている政治に心が塞ぎがちです。でも希望の灯が消えないように祈りたい。その灯をわずかでも点したい」と。「円き空を二つ世界に割りて行く飛行機雲の円き直線」秋の一首です。

10月6日 13日は運動会とのこと。競技参加可と主治医判断とのことでしたが見学とします。

I子さん、ありがとうございます。祝バースデイと「花の詩集」(串田孫一・田中清光編)を贈っていただきました。とってもなつかしく嬉しい本です。明治の詩人から大正、そして少しの昭和生まれの詩人まで、人道主義、民衆詩、アナキズム・プロレタリア詩・モダニズムから「四季」派の抒情から「歷程」含まれていると「はじめに」で記されています。中学から大学まで詩作に熱中していたのを思い出して、なつかしい詩にも出会えて幸せです。中学時代



する民族浄化が続いているからです。こうしたネタニヤフ政権に強いられるインティファダ状態が西岸で広がっています。

10・21はまた、国際反戦デーです。昔と違って国際主義、国際連帯はとつても弱くなっていると友人のお便り。今のグローバル世界程国際連帯は可能性が大きいのに……。

また、今日は宮崎先生のバースディ。1925年生まれの先生は満90歳。卒寿は数え年なら、卒寿をはるかに超えられてお元気です。常に好奇心を持ち、向上心を持ち、学ぶことを楽しみとする先生だからこそその頭脳、身体元氣な卒寿。おめでとうございます。先生が総長の時建てた明大リパティタワーで再会の乾杯を楽しみにしています。

10月22日 今日処遇3類になって購入許可の出たものが届きました。座布団、サンダル、花瓶。

昼には、9月の私のバースディ用のお菓子が、なにか1ヵ月遅れて10月に届きました。ヤマザキのチョコ・ブッセです。

そのあと、昼休み明け13時過ぎ、3類になってはじめて申し込んだ「嗜好品食べる集い」とのことです。参加。テレビを見ながら45分で自費購入した袋詰のお菓子を食べるとのことです。今日はさっきお菓子を食べた上に渡されたのはジュース1缶、ビスケット類2箱。チョコレート味のスカスカのお菓子1袋と、質より量。ジュース飲んで、チョコ味封つまんで、ビスケットビスケット何十枚ものうち3枚がやっど。食べきれない分は廃棄ですが……。和菓子、チョコレートやチョコブッセとかだといひのですが、同じような大量のビスケットは食べられません。14時からならいいのに……。他の人も半分も食べてないままみな廃棄してます。もったいない!!

今日はとっても良い本を入手しました。「ガザ・戦争しか知らない子どもたち」というポプラ社の写真絵本です。読んでみると、自然に涙が零れてしまう本です。(書評は15頁に)

10月23日 今日昼食時花束が届きました! といっても、3類になって購入可になり、ぜいたく品ですが買ってみました! 東拘では、友人たちがいつもたくさんの花を差し入れてくださったのですが、ここでは不可。それが初めて購入可となって、花が

届きました。ピンクのカーネーションのスプレー咲き2本と白い小菊、これもスプレー咲きのもの3本です。セロファンに包んだ花束のようになって届きました。セロファンは入りません。すぐ適切な長さに丈を切ってもらい、机の上の花瓶に活けました。何だか空気ががらりと変った! ように明るくなります。花一つで変わるわねえ! と担当も看護師さんも愛でていました。

10月26日 デジカメ歌人寒露のお便り。みごとに白式部。これが紫式部の紫色の実に変わるのでなく「白式部」のままなのでしょう。「枕草子」の作者の名がほしかった白式部では源氏の君に対抗できないわ」のコメントのユーモアも。「蛇」匹初冬の朝の農道を横切れず轢かれ骸を晒す」の一首を選びました。

10月28日 20年にわたって、冤罪で身柄拘束されていた夫婦がやっど釈放され、再審の罪が開いたというニュースはうれしいですね。「検察は過ちを認め謝罪を」と求めています。当時の若い夫婦、残された小学生の息子、どんなに怒りと苦しい年月だったでしょう。夫が語っているように、様々不安に陥れて、警察や検察の筋書きにそって自供書をつくり署名させる。それがすべての証拠となってしまふ。いつも同じ手口です。庄司弁護士が語っていた言葉を思い出します。「取り調べている相手によく思われようと思った瞬間から変節が始まる」と。普通の人が見に覚えのない罪に問われ動揺している時に、プロがシナリオ通りに誘導する権力の犯罪を公判で追求してほしいと思います。

Kさん京都の北の紅葉きれい! ありがとう。七回忌の様子伝えてくださって目に浮かびます。みんなの友情愛情が伝わります。

もう秋から、こちらはすぐ冬。でも、11月1日から、今年はカイロ使用許可で助かります。11月8日は、逮捕記念日、もう15年目です。あの時の様々な想い、悔や新しい本名での前向きな生き方や出会い。15年前大阪から東京へと連行される新幹線の中で考えていた、開き直ったようなワクワク感、いろいろな友人と再会したり、出会いたいと、好奇心でしたが、そのようにいっぱい支えられ実現したことも多かったと、改めて想います。みんなに謝罪と感謝の11・8は、もうすぐです。

## ★読んだ本★

(「日誌」の中の読んだ本への記述を編集室が抜萃したものです)

重信 房子



「暴露—スノーデンが私に託したファイル」(グリーン・グリーンウォルド著・新潮社刊)を読みました。感動的で、ドラマティック、真迫、真実のドキュメントです。国家安全保障局(NSA)の国家犯罪を世界に明らかにするためにエドワード・スノーデンが何を望み、どのように慎重に著者らジャーナリストを選び、権力に潰されずにこの偉業を成し遂げてきたのか、率直に記されている分、刺激的なドラマです。ミステリーのような手に汗握る前半と後半はエドワード・スノーデンから託されたNSAの機密の犯罪証拠の数々を解説しています。一読して、このエドワード・スノーデンの不屈の道義的原則に貫かれた意志と冷静な戦略戦術によって、この若者の願いが、一人では実現できない大きな力を結んで著者ら良心的なジャーナリストや新聞社を動かし、アメリカの巨大な犯罪を白日の下に晒すことができたことに瞠目するばかりでした。「スノーデンと真つ先に密会して数万の機密文書を託され、英紙ガーディアンにピューリッツァー賞をもたらした著者が今彼の実像とファイルの全貌を白日の下にさらす! 世界24ヵ国同時刊行」と帯に銘打っている通りの価値あるルポルタージュドキュメントです。

著者は、ブッシュ政権が令状なしで国民の電子通信を傍受するようNSAに命じていたことが、ニューヨーク・タイムスのスクープで明らかになって以降「政治ブログ」を立ち上げ、権力を監視する立場を徹底するジャーナリストとしてよく知られていました。著者の調査報道の姿勢に注目したスノーデンは、当初彼にコンタクトをしたいとメールでアプローチします。自身が熟知しているように、NSAが著者らを盗聴しているので、それにひっかかって安全なソフトやシステムを使うよう示唆します。しかし、それを使わない著者にはスノーデンとしては、打ち明けることができずにいました。著者は、毎日の多忙と「えたいの不明な申し出」(実は後のスノーデン)に集中して対応しきれず放置。その後スノーデンは著者の盟友であるローラ・ボトラス(イラク戦争の最中スナ派地域に入って、アメリカ占領下の庶民の生活を描いた「わが故郷、わが故郷」がオスカー賞にノミネートされたことでも知られる。

自国を出入国するたびに、空港で国土安全保障省に40回近くも拘束尋問押収されながらも、真実の報道のために闘ってきた人で、グリーンウォルドが記事にしてきた人)の例にアプローチし、「内部告発」の意向を伝えます。

この2人がスノーデンの「香港に来てくれ」の誘いに権力の罠ではないかと思う一方スノーデンから示されたファイルと彼の意志を伝えてきた内容から、本当の志を勘で嗅ぎ取り、ガーディアン紙の信頼できる仲間を巻き込んで香港に向かいます。そして予想外に若かった告発者の真の志を共有する同志として、いかに効果的に人々に知らせるべきか、暴露される機密を否定するはずの権力とどう闘っていくか、話し合いながら、大暴露に至るのです。

スノーデンは、彼が悪者に仕立て上げられることも、これまでの告発者同様牢獄につながることも、覚悟して行動しました。唯一彼が恐れたのは、人々のための告発が誰の眼にも注目されず、引きつづき権力が犯罪を続けることでした、彼は言っています。「私の唯一の動機は、自分たちの名のもとに何が行われているか、自分たちに対して何が行われているかを人々に知らせたいということです。」

合衆国政府は属国、なかでも共に「ファイブ・アイズ」を構成するイギリス・カナダ・オーストラリア・ニュージーランドと結託し、世界中に秘密の監視システムを張りめぐらしています。これから逃れる術は何一つありません。自分たちの国内のシステムに関しては制度や嘘で一般市民の監視から守る一方、ひとたび機密漏洩が起こると、国民の知る権利を認めるために限定的に機密保護策を選んでいくことをことさらに強調して、人々の怒りの矛先が自分たちに向かうのを逸らします。



ここに添えた文書は、すべてオリジナルの現物であり、無防備な世界に対する監視システムがそれ自体の保護を強化するためにいかに機能しているか、そのことを理解していただくために提供するものです。

……私としては、一般市民がこうしたことを知り、議論を深めて改革につなげてくれることを祈るばかりですが、時とともに人間の政策が変わることも頭に入れておいてください。権力者の欲求次第では、憲法すら覆されてしまうのですから」と、スノーデンは述べています。

何だか日本国民に語りかけているようにも聞こえます。こうしてNASAが世界最手インターネット企業各社のサーバーから情報を直接収集するPRISMプログラムをはじめ、世界中の間で交わされている電子通信のすべてを収拾、保管、監視、分析できるようにしようとする監視国家アメリカの目的が明らかにされています。もちろん、アメリカ国内の国民に対してもです。日本もスノーデン自身勤務した三沢基地中心に、そうしたグローバル戦略の下にあり、日本国内情報も、同様に収集されてきたのです。それらが後半に詳しく示されています。

スノーデンは、情報を正確に世界に伝えるためにも、自分がどこで働き、何をしてきたのか告発者として自分を晒して示す覚悟で、香港からガーディアン紙を通した告発をグリーンウォルドの記事から発していきます。また同時に、ローラ・ポイトラスがスノーデンをインタビューするグリーンウォルド共々ドキュメンタリーフィルムに撮影していきます。(これは「CITIES FORWARD」というタイトルの映画になっているようです。)

その後スノーデンへの追跡、二人の共同者への逮捕の脅しなど起きました。しかし、闘いつづけ、今では連邦議会の共和、民主両党の議員による「NSA計画への予算取り消し法案」提出(205対217で反対が12票多く廃案となったが)や世界国連での論議や人権活動家、法律家など世界の良心による追求は、つづいています。

グリーンウォルドは「オバマ政権はこれまでの全政権での累計数よりさらに多くの告発者を逮捕し、いかなる情報漏洩も許さない恐怖の風潮を作り上げようとしてきた。しかし、スノーデンはその空気を打ち破った。彼は合衆国の包囲網の外に出て、自由の身を確保した。それだけではない。隠れることを拒み、堂々と人前に出て正体を明らかにした。その

結果、世間の眼に映った彼の姿は手錠をかけられ、オレンジ色の囚人服を着た受刑者の姿にはならなかった。自分がどんな行動をし、なぜそうしたかを説明し、自らははっきりと主義主張も述べる独立した人間の姿だった。そんな彼には、さすがに米政府の常套手段も通用しなかった。ここに未来の内部告発者たちへの強力なメッセージがある。

——真実を語ることは必ずしも自らの人生を棒に振ることを意味しない。スノーデンの勇氣ある行動は、われわれ全員を大いに鼓舞してくれる。まず、自明の理のようなことながら、彼は人間には誰にも世界を変えるすばらしい能力が備わっていることを思い出させてくれた、と記しています。

人間としての良心に基づいた善悪の判断道義的責任感、それを貫く小さい一人からの出発がどんな力を育て広げることができたかを示してくれる、是非読んでほしい本です。希望がふつふつと湧く本です。

(10月3日)

\*\*\*\*\*

「コミックばかり読まないで」(屋間孝著・イースト・プレス社刊)を読みました。本の帯のキャッチコピーに「これが現代日本のルポルタージュだ」とあります。この本の著者は、「元祖ルポライター」と言われた竹中芳の本に触発されてルポライターの道を歩み続けたとのこと。そしてこの本は自己史を絡めて経験的な「ルポルタージュ人間屋間たかしの現在報告」といった内容です。

本屋で眼に留めた一冊の本。竹中芳「決定版ルポライター事始」の最初の数行に度肝を抜かれたという。「モトシンカカンヌ……」という言葉が沖縄にある。資本のいらぬ商売、娯楽。やぐさ。泥棒のことだ。顔をしかめるむきもあるだろうが、売文という職業もその同類だと、私は思っている」という竹中の文。「定価760円+税の文庫本をレジに持っていった私は、そのまま会社へは戻らず、その日一日をかけて何度も読み返した。そして私はルポライターになろうと決めた」という著者。

こうして人づてに風俗やアダルト専門の編集プロダクションを通してルポライターの道を歩み始めたこと記しています。「はじめに」で「ルポライターという職業は休息とは無縁だと思っている」「発表した原稿に対して、寄せられる声なき声は賞賛ばかりではない。『最大級に酷い』『頭悪い』『また屋間たかしか』

いかなる言葉を浴びせられようとも、それで構わないのだ。強がっているのではなく『三文文士』の屹立は、かくあるべきだと思っているからだ」「見知らぬ人々の心を揺さぶることを思うと、私の心は爽快になるのだ。私が求めているものは、社会的な地位や名誉とは真逆の側にある。最低限の地獄から世界を獲得するのであるから」と意気込んでいます。「向こう見ず」で、それでいて心のそこの方にある育ちから来るのか、生真面目さがこの人のミスマッチな人生を作り出している面白さがあります。

そんな著者ですから、私が東京拘置所に居た時代には、面会に来てくれて、友人のマンガ家と一緒に来たこともありました。著者は私とは全く縁のないマンガ・アニメの世界を取材し、その中で「表現の自由」というテーマを「半ばライフワーク」のように追求し、政治的な広がりも作り出していったようです。

本の第1章では「表現の自由を語る前の小論」として自らの取材した猪瀬直樹や一水会との交流、ロフトプラスワンでのエピソードなど「屋間たかし」をルポルタージュし、第2章「大衆文化を包み見えない檻」では、戦後日本の性問題、風俗に関する「欲望」と「規制」から、マンガの規制、少女ヌード「有害」コミックの問題と「成人向け」マークの登場など、文化を抑圧する構造と現状について記しています。第3章「表現の自由をめぐる現実」では、都の青少年育成条例をめぐる攻防や出版規制、児童ポルノ法から自主規制の横行など現実の事件を通して表現の自由を問い、第4章「拡大するマンガとアニメの中で」では、アニメ世界の拡がりの中で作り手、「興行師」売り手、出版社の実情を当事者たちと語り合う中でさぐり、第5章「さらなる表現の旅へ」では、表現者たちと屋間たかしのエピソード、若松孝二らとの出会いなど、第6章「むすびのまくら」そして伊那市の百周年イベントを綴りつつ、「やっぱり辺境最深处に向かって退却せよ」とこれからの自分の道を示唆しています。全体として各章経験を通して著者が学習し、行動する姿を記しているのです。が、ある時は場違いに突出し、ある時は良かれと行動する非常識なエピソード(鈴木邦男に対してやダカーボ編集長に雑誌を投げつける)、ある時には、本来持ち合わせている「純朴さ」など、著者の「ルポライターになるぞ!」「本を出すぞ!」という必死の努力には、笑ってはいけないうところで笑わせてくれる本です。

著者の頼りにしている友増田俊樹の「解説」「屋間たかし評」には、東拘で対面した著者の姿がとてもよく出ていていると思い、ニンマリとしてしまいました。増田の「柔軟な観点で人々の心に何かを伝えるルポライターになってほしい」と願う友情の解説は読ませます。

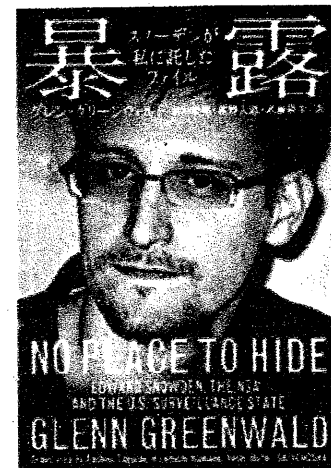
「ルポルタージュとは主観である」と言い切った竹中さんは広い分野に博識で、文章にリズムも味もありました。(80年代竹中さんが「サンデー毎日」に連載した私の一代記みたいな「主観のルポルタージュ」には、ちょっとうーんでしたが……。)好奇心で主観を鍛え、素朴さを大切に文章を鍛え続けてほしいと思いつつ読みました。(10月6日)

\*\*\*\*\*

「ガザ・戦争しか知らない子どもたち」(ポプラ社刊・清田明宏著)という写真絵本を読みました。この本は国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)で、保健局長として働いている清田明宏氏がガザ・パレスチナの実情を知って欲しいと考え、発行した本です。国際機関にかかわる著者のような人がどのようにパレスチナをとらえ、日本に紹介しようとしているのかということも関心があり、読んでみたかった本です。

この本を捲ると、ガザの破壊された家、道路、破壊された部屋から撮った空や風景、海。人びと、子どもたちの笑顔。短い文で写真を説明しているのですが、読んでみると自然に涙が溢れてしまう本です。

まず、著者は青いガザの空とその下に広がる膨大な破壊瓦礫の写真のところで、1948年から戦争が続いていることを記し、『イスラエル』と『パレスチナ』二つの国の争い。21世紀に限ってみてもガザですでに4回も戦争が起きている。2006年、2008年~2009年、2012年、そして2014年」とコメント。イスラエルへの批判はないのに、この写真絵本は一貫してイスラエルの非人





道的行為を浮かび上がらせ、告発しています。

そして、ページを捲ると、「ガザ・戦争しか知らない子どもたち」と記し、「2014年7月8日、イスラエルとガザの戦争が始まった。攻撃は8月26日の無期限停戦の調印までとどまることなく続き、ガザでは多くの人びとの命が奪われた。市民1600人が死亡し、そのうち500人は子どもだった」と。そして、「私はこれまで何度かこの地を訪問してきたが、このときの訪問はこれまでで一番つらいものであった。と同時に、もっとも勇気づけられ、心が動いた日々となった。これはその時の記録である」として、子どもたちやUN職員たちの破壊された自宅の前や内側に立って語る姿を写真と共に記しています。たとえば、ガザ北部に住むイマン15歳。2006年、7歳から数えて戦争は4回目。家は破壊された」と著者は記す。「母は『ガザの子どもたちも平和で自由のある世界で世界中にどこにでもいる普通の子どものように、日々を楽しんで欲しい』という。それを聞いたイマンは言う。「このままなら、ガザを出て他のところで勉強したい」彼女の言葉に、その場にいたみな、一瞬、黙る。母親が何かを言おうとしたが、とても悲しいほほえみをイマンに向けたことしかできない。たまらなかった」と著者。

写真は家族たちとわずかに残された家具、その瓦礫の空間で寝ているという情景を示している。12歳のモハメドの絵『逃げる途中いくつ物死体を見た』と言った」という少年の写真。ナダは6歳から戦争を体験した話。著者は言う。「イマン、ナダ、モハメドは、特別な子どもではない。ガザで暮らす100万人のすべての子どもが、イマンであり、ナダであり、モハメドなのだ。ここでは6歳以上の子どもたちはみな、3回以上の戦争を経験している。『戦争しか知らない子どもたち』だ。彼らが戦争の被害を心配して泣くこともなく、壊れた街が見える部屋で、将来を嘆くこともなく、普通の子どもと



して生きていくことができる社会を是が非でも作っていかねばならない。それにしても我々大人は、何という世界を作ってしまったのか……。そこには、たくさんの幼いガザの子どもたちが笑っている写真がある。

そして、「素晴らしい人びと」として医療スタッフを写真で語っている。「UNRWAの職員は99%がパレスチナ難民、戦争中も職員の6割以上が毎日出勤していた」として、ジャバリアの保健所長の女性やリマル保健所の看護婦さんらの写真と言葉が記されている怖い、自分の子どもがまだ生後6カ月でも出勤する。「患者さんが待っているから。私を必要とする人がいる限り、私はここに来て働くだけです」と答えている。

空襲の自らの生死も定かではない現実の中で、引き裂かれる思いでそれを実行し、生き残って来た人びとの何と深い言葉なのだろう。私は、写真に引き込まれ、多くのパレスチナの友人を重ねつつ、読んでいます。

また、日本の3・11に連帯して、ガザで毎年3月、風をあげるパレスチナの子どもたちの写真。また、2015年3月、ガザの子どもたちに連帯して、釜石で風をあげる日本の子どもたちの写真も載っています。そして、最後の写真は、再び訪れたガザのイマン。イマンは「ガザを出たい」と言っていた子。「イマンは将来産婦人科医になりたいと言うのだ。『だって、子どもは大切だから、ガザの子どもをたくさん助けたいの』」で終わっています。

そして、2014年の戦争の被害を最後に記しています。「死者の他負傷者11,100人、うち子ども3,300人、新学期登校不能の子ども50万人、被害を受けた学校150校、住宅被害1,800戸、ホームレス110,000人、病院・診療所の被害66」何という悲惨な状況でしょうか。復興はされていません。

この戦争を「自衛権の行使」としてネタニヤフは言いつのり、またそれを支持したのは、米オバマ政権をはじめとする西欧の政権です。唯、現実をそこに居る無名の子どもと市民を撮り、壊されたガザを撮り、そして彼らの言葉を記す静かな告発の書として、是非読み広げて欲しいと思いつつ読みました。

悲しいだけでなく、UNRWAのスタッフ、ガザのマガジ診療書の医師たち、被害を受けたスタッフたちがWE BUILD GAZA AGAINと各々カードを掲げて笑っている写真もあります。どんなに厳しくても自分

たちの故郷、祖国を守り、生き、闘い続ける姿に勇気もらったのは著者ばかりではありません。読者も同じ思いにかられる本です。

この本を読み、資料を探して、ガザの4回の戦争を振り返って見ました。

2006年、ハマス圧勝の後、6月28日から11月26日、ミサイル攻撃と地上侵略、パレスチナで409人殺され、同時に、7月13日から8月14日レバノン侵略、100万個のクラスター爆弾が落とされ、1,700人が殺され、そのうち3分の2が民間人。

2008年12月27日から2009年1月23日、空爆と地上侵略。1,434人殺された。

2012年11月の8日間、(エジプトムルシ大統領停戦仲介) 殺された人170人。

そして2014年の被害です。

民族浄化であり、パレスチナの脅威を煽り、シオニスト教育とすることと、武器の改造の実験場とし

て、ドローンや兵器を高めるために、イスラエルにとってはパレスチナ攻撃、殺害は必要事となっているのです。この殺害は、米政府はじめ、国際社会が共犯者です。

たくさんの日本の子どもに、この本を読んで欲しい。(10月22日)

#### 131号の誤植の訂正とお詫び

3頁左列5行 郭→核  
5頁左列7月16日の上から10行 謝って→過って  
5頁右列下から9行 必要な時にはなた→必要な時にはまた  
8頁左列下から20行 以下に→如何に  
11頁左列1行 解放→開放  
12頁右列1行 は描いて→を描いて  
13頁左列28行 アジュンダ→アジェンダ

## 「イスラーム国」と宗派戦争(下)

重信 房子

### 4 ISはどのように育ったのか

(4) 陣地戦から建国へ——「イラク・イスラーム国」登場

憲法に反対した4つの州を基盤陣地として、反米・反シア派意識が強まった。アルカーイダ系の反米・反シア派武装勢力とスンナ派住民の結束は強まり、「イラク・ムジャヘディーン諮問評議会」からはじめて「国」を名乗ることになった。「こんな憲法の下でシア派の下僕になるくらいならスンナ派で独立すべきだ!」。住民の声も大きかった。2006年10月「イラク・イスラーム国」が誕生した。

この「国」の誕生の前には、すでに同年6月、ザルカウィーは米軍の空爆によって殺された。あたかも「獲物育成」の網にかかったような行動をとった「粗暴な男」(と西側から言われていた)は、「利用価値」が済んだかのように殺された。またこの頃はバグダーディーもまだ米軍管理の刑務所に収監されていた。「イラク・イスラーム国」発足当時のリーダーはエジプト人だったようだ。アブ・アイユーブ・アル・マスリ(彼らは通り名にいつも出身地の名を付す。ザルカウィーはザルカの人、バグダーディーはバグダッドの人、マスリはエジプトの人の意)。

この「イラク・イスラーム国」はバグダッド近郊の他、アンバール州、ディヤラ州、ニナーワ州などのスンナ派多数派地区を陣地として、バアス党時代の行政機能を活かし、反米・反シア派政権の武装闘争を活発化した。この「イラク・イスラーム国」になると、バアス党の力が大きくなった。その分、イラク内戦は深まっていかなるをえない。

2006年12月、フセイン大統領が処刑された後、イラク・バアス党首となり、2015年4月17日、イラク政府軍とイラン革命防衛隊による「IS掃討作戦」の戦闘によってサラフディーン州で戦死したと伝えられたイザット・イブラヒム・アッドウリ。彼こそこの時、2006年から07年自ら指揮する軍団と「イラク・イスラーム国」との同盟を打ち出した人であり、2014年の「IS宣言」時にも賛意を表明したと言われていた。アッドウリはサッダー・フセイン大統領同様米軍によって指名手配され地下戦争を闘っていた。

バアス党と、イラクとイランのシア派の対立は根深いものがある。イラクのバアス党政権時代、それでもイランのホメイニ師の亡命は許可していた。イランのパーレビ王政の圧政を逃れてホメイニ師はイラクのナジャフに居た。南部のシア派地区であ

る。しかしイランのイスラーム革命の勝利が見えてくると、イラク・バース党は1978年10月8日ホメイニ師を国外追放した。その結果、ホメイニ師はパリから凱旋帰国した。サッダームはシャー王政の崩壊を察して、イラン革命が隣接するイラク・シーア派を刺戟し、シーア派革命の波及を怖れたためである。少数派スンナ派の基盤を第一とするサッダーム・フセインがアル・バクル大統領から地位を強引に奪うと、サウジアラビアと結託してイラン戦争の準備をはじめた。このあたりから、「政教分離世俗主義」は変質していったといえるだろう。それほどイランのシーア派によるイスラーム革命は、「スンナ派」意識を覚醒した。

イラン・イラク戦争は、こうしてイラク側の挑発的国境衝突から始まったのだ。そのため現在に至るイラクでの内戦は、イラン・イラク戦争の復讐戦のように激しくなった。権力掌握したシーア派はスンナ派を殺害、逮捕拘束し、職場から排除するし、スンナ派はバース党、住民を挙げて、米軍とシーア派政権に武装斗争を拡大させた。

2007年には、米軍は2万8000人もの増派援軍によってスンナ派4州の掃討作戦を図るをえなかった。一時期、米軍による外交工作によって、スンナ派部族長らの要求も受け入れたことで、武装攻撃より財源確保や失業対策の地域復興に軸足を移し、中央政府への対策を求めるようになった。そのため「掃討作戦」も奏功したようにみえた。「イラク・イスラーム国」の反米・反シーア派武装斗争は止んだわけではないが、この時期に「国」の体制を整えていった。

この頃、2009年頃か、バクダーディーが米軍収容所から出所した。「イラク・イスラーム国」のリーダー、アル・マスリら主要幹部らが、それまでに米軍の掃討作戦によって殺されていたという説もあ

るし、またアル・マスリらがバクダーディーを師と仰ぐことによって、2010年5月、バクダーディーは「イラク・イスラーム国」の指導者となった。

#### (5) 「アラブの春」と米軍撤退

2010年から11年、いわゆる「アラブの春」がチュニジア、エジプトで始まると、民衆の権威主義的な独裁政権に対する非暴力の抗議と革命の波が広がった。中東は米欧の後楯のもと、パレスチナ人を犠牲にした「イスラエル建国」の結果、戦争国家化を強いられ、軍事政権が常態化してきた。冷戦崩壊後はこうした政権は改革を求められながら、自らの権力の維持にますます強権化していった。「治安」の名で秘密警察による監視支配を行う一方で、国民の窮乏、失業に應えることなく特権層化し腐敗していった。「もうたくさんだ！」民衆の怒りはチュニス、カイロで速い速度で政変を作り出し、民主化要求はアラブ中を席捲した。

しかし、シリアでの動きは西側諸国が支援したにもかかわらず、当初は散発的なものに終わった。シリアは「戦時国家」として秘密警察・治安部隊が強いので、抑え込まれたこともあったかもしれない。また世俗主義政権下で比較的、少数民族・宗教が護られてきたことと、「社会主義政策」によって貧民層への最低生活条件はなんとか保障されていたために、エジプト、チュニジアの経済的要求が波を起こすことはなかった。

アサド政権は「アラブの春」の流れに先行して「バース党を指導政党とする」という憲法を改めて、改革を打ち出して体制維持を図ろうとした。体制内での改革を求める流れに沿った措置であった。その一方でムスリム同胞団の政府打倒を求める武力攻撃に鉄拳政策をとった。82年の「ハマ蜂起」で知られるムスリム同胞団は、他のアラブの非暴力行動とちがって当時から武装していた。「ハマ蜂起」とは70年代から82年までの斗いである。ハマで蜂起したスンナ派住民とムスリム同胞団の何千人かが治安部隊によって虐殺されたという。以来ムスリム同胞団は非合法団体であったが、この「アラブの春」に呼応して武装斗争を再び始めていた。

この機に乗じて「イラク・イスラーム国」を陣地として、シリアのスンナ派勢力へと支援が強化された。当時「イラク・イスラーム国」には、アルカーイダ系勢力がすでにチェチェン人などロシアから転戦してきた者、アルジェリアや北アフリカで武装斗争していた者らが多く結集していた。シリアのムス

リム同胞団から「イラク・イスラーム国」に転じて斗っていた者も多くいた。これらの勢力がシリアへとイラクから戦場を広げるようになった。かねてよりシリア・バース党打倒を目指す米英イスラエルやトルコ・サウジアラビア・カタールらのスンナ派政権まで、反アサド政権の反体制勢力を煽動し、支援しはじめた。

こうしたアサド政権に対する斗いの拡大の中から「イラク・イスラーム国」のシリア人メンバーを中心に、2011年12月に「ヌスラ戦線」を立ち上げた。そこに外部からのアルカーイダ系義勇兵も加わって、シリアでの統治の空白地帯を広く支配管理するようになった。

一方、イラクでは2011年末に米軍がイラクから撤退すると宗派戦争は激増した。米議会調査局のレポートによると、2012年にはイラクにおいて「イラク・イスラーム国」が複数の都市を攻撃し、一挙に25人以上が殺害された日は12日あり、そのうち4日は100人以上のシーア派住民が爆殺されたという。自動車爆弾、自爆攻撃が頻発し、シーア派が集まる市場、カフェ、モスクなど民間人大量殺害によって、2013年には7818人が殺され、18000人近くが負傷した。2008年以降、もっとも凄惨な被害に、治安部隊が撤退すると、そこに「イラク・イスラーム国」が勢力を拡大した。「アラブの春」がエジプトのクーデター権力によって反転すると、その失望は逆に武装斗争や宗派的な解決方法に吸引される傾向を生みだしていった。

#### (6) 国境を越える斗い

米欧は反アサド政権の勢力、なかでも「国民連合」や「自由シリア軍」など「穏健派」と西側が呼ぶ勢力に期待した。米欧の音頭で「シリアの友人会議」を立ち上げ、その「シリアの友人会議」参加の国々が、正式にアサド大統領の退陣と反体制民主化勢力の政権樹立を支援した。「悪」と「正義」の対立のようにメディア戦がくり広げられた。そして「シリア紛争解決国際和平ジュネーブ会議」やアサド退陣を前提とした反体制派の協議の場を作った。

しかし、くり返し会議を開いたりしたが、埒が明かなかった。親米欧シリア反体制勢力は、そうした会議に参加しても国内に基盤がなかった。国内基盤が比較的あった自由シリア軍はバラバラだし、「地域調整委員会」は、親米反体制勢力の口先だけの政治交渉に批判的だった。米欧・反体制派は、アサド退陣の合意の上にロードマップを作るべきだと主張

し譲らない。

一方、アサド政権は2014年の大統領選挙で再選をめざして着々と進め、協議は前進しない。ロシア、イラン、中国がアサド政権を正式な政権と認めつけ、一方西側諸国やアラブ連盟諸国はアサド政権を認めず、「反体制穏健派」にその権利を与えようとしてきた。しかし当の「穏健派」は内紛をくり返していた。

そうこうするうちに、「イラク・イスラーム国」は「ヌスラ戦線」の統合を発表し、2013年4月には「イラクとシャームのイスラーム国（ISISまたはISIL）」への改名を宣言した。（「シャーム」とは地中海東部沿岸の呼び名で、ほぼ現シリア地域）

反体制派のさまざまなグループが「自由シリア軍」として統合する過程の対立を利用して、ISISはシリア東北部にさらに陣地を広げたのだった。「イラクとシャームのイスラーム国」の指揮官はバクダーディーが就任し続けた。

しかし、ヌスラ戦線の創設リーダーの一人、アブー・ムハンマド・アルジャウラーニー（名前からゴラン高原出身者）は「ISとの統合にはヌスラ戦線は賛成していない」と、異を唱えた。ヌスラ戦線はアサド政権打倒第一であり、宗派戦争によってイスラームの領土拡大重視の路線を取ることに反対したという。

アルカーイダ本部のザワヒリもアル・ジャウラーニーを支持し、バクダーディーに対してシリアから引き上げるように指示した。アルカーイダ本部はアフガニスタンの「イスラーム首長国」に見られるように、各国のイスラーム国化による「インターナショナル」を考えていたようだ。

それに対して、バクダーディーは、国境を超えて、むしろ植民地支配の下で引かれた国境を壊し、領土拡大を優先した。「グローバル・イスラーム国」建設を求めたのだろう。バクダーディーはシリアもイラク同様の各州として位置づけている。「われわれは神の教えに従うまでで、それに矛盾する要請は受け付けられない」と言って、バクダーディーはザワヒリの指示にもアル・ジャウラーニーの要求にも従わなかった。これまでも幾度もアルカーイダ本部と対立してきたバクダーディーは、その後、イラク第二の都市モスル制圧を経て、2014年6月19日、「イスラーム国」（IS）を名乗り、カリフ制国家登場を宣言した。



以上のように、その出生から流れを辿ると、アルカーイダ勢力が米軍の侵略とその占領政策の中で、宗派対立を戦略的にとらえながら、スンナ派住民を巻き込んでISを作りあげてきたことがわかる。当初は小さなアルカーイダ系勢力が、スンナ派住民、バース党を基盤に陣地拡大戦略によって再生してきたのである。

## 5 アルカーイダの戦略構想とIS

2005年にアイマン・ザワヒリがザルカウィーに宛てた手紙が西側情報機関の手に入ったらしい。その手紙に「イスラーム国家建設戦略」がある。「イスラーム国家の樹立を宣言すれば、近い将来の米軍の撤退が作り出す空白を埋められるだろう。間違いなく、近隣諸国が攻撃してくるだろうが、それをうまく抑え込めば、かつて遠大な地域を支配したカリフ制国家の再現を宣言できる。(だが、この計画を成功させるには)計画へのスンナ派の支持を取り付ける必要がある」とザワヒリは記していたという。

この構想を受けた結果と思われるが、『イスラーム国の衝撃』(池内恵著)の中に、「アルカーイダ構想」が記されている。それは2005年5月にヨルダン人ジャーナリスト、ファード・フセインが、アルカーイダ系勢力「イラクのアルカーイダ」らを現地取材し、報道としてまとめたものである。

フセイン記者は「ザルカウィー アルカーイダの第二世代」というタイトルでアラビア語紙に連載したという。それによると、「2020年には世界規模でのカリフ制イスラーム共同体の再興をめざす」というもので、以下のような20ヶ年計画として構想されている。

第一段階「目覚め」(2000年～2003年) 2001年の「9・11事件」は、そのような戦略構想のもとに位置づけられたものだったという。

第二段階「開眼」(2003年～2006年) 外国勢力に占領され、イスラームに対する陰謀や攻撃されている事実が、ムスリムに認識され、各地でジハードに参加するようになる。(この時期、2005年5月ルポルタージュがフセイン記者によって書かれた後、2006年6月にザルカウィーは殺される。そして2006年10月から国を名乗りはじめる。「イラク・イスラーム国」[略称ISI])

第三段階「立ちあがり」(2007年～2010年) この期間は反米・反シリア派戦争と、スンナ派地域とのつながりが強固になり、また外部アルカーイダ

勢力の流入も広がっている。中東では2008年から09年にかけて、イスラエル軍のガザ空爆が続いた時期でもあった。

第四段階「復活と権力奪取と変革」(2010年～2013年) この時期2010年12月のチュニジア青年の抗議の焼身自殺から「アラブの春」と西欧からほめそやされた民衆革命がはじまった。独裁的権威主義政権の特権化・縁故主義の腐敗・経済政策の失敗や民衆抑圧に抗議して革命が起こっていった。この機に乗じて「イラクとシャームのイスラーム国(ISISまたはISIL)」と名乗るのは2013年4月である。

第五段階「国家宣言」(2013年～2016年) 2005年、フセイン記者に語った話では、この時期を「イスラーム国家あるいはカリフ制国家設立」を想定しているとのことだった。この構想に沿うように2014年6月29日、聖なるラマダン(断食月)の初日、「カリフ制国家イスラーム国」(IS)が宣言されている。

第六段階「全面対決」(2016年～2020年) この見通しよりも早く、ISに対する全面戦争が引き起こされているのが現在ととらえることができる。

第七段階「最終勝利」(2020年) カリフ制国家再興勝利として、すでに2005年に展望されていた。以上のように、アイマン・ザワヒリとウサマ・ビン・ラーディンの構想を受けた当時の「イラクのアルカーイダ」の者たちは、「夢物語」ではなく構想を戦略的に推し進めてきた。

2005年、ヨルダン人ジャーナリスト、フセイン記者はそこにこう記しているという。「アルカーイダの理論家たちは将来の変化が生じることを信じている。その結果、変革と世界的なジハードの潮流を利し、新しい活力ある有効なものが再生するのだ」「イスラーム国家を設立する黄金の機会が生じるのだ。国家の宣言はアルカーイダの戦略の目的である」と、初めての「イラク・イスラーム国」宣言の時にも時期尚早に宣言し、ザワヒリらの考えと齟齬があった。

しかしザワヒリは、2007年12月には「イラク・イスラーム国は、合法的かつ健全な方法で設立された首長国だ。イラク内のムジャヘディーンと部族の多くの忠誠を得て正しく樹立されている」と追認している。

2010年にバクダーディーがリーダーシップを執ると、戦略実現を加速した。アルカーイダ本部と

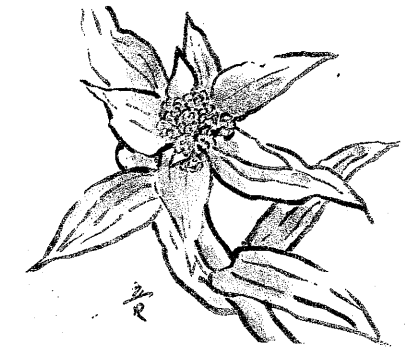
矛盾を持ち、それを無視して「我々は神の教えに従うまでだ」としてカリフ制国家を宣言し、自らカリフと名乗った。その後、アルカーイダ本部に忠誠を誓っていたアフガニスタンからアフリカに至るアルカーイダ系勢力・武装イスラーム勢力は、ISへの忠誠に転換した者も多い。

アルカーイダの戦略構想は、なぜ一定の成功を収めてきたのか？ それは中東に蔓延する不正が根本にある。米国からサウジアラビア、カタールら外部勢力の介入、加えて自国政権による不正によって生存の斗争を強いられていること、そこに根本問題がある。

しかし、ISは宗派戦争を第一とする限りムスリムの戦略上の勝利は得られない。逆にムスリムをますます広汎な戦乱にかき立てることになる。宗派戦争のジハードを煽動する限り、軍事的純化はイスラームを口実とした権力斗争となっていく。実際に「国家」としての領土を広げた軍司令官バクダーディーのもとには、バース党旧イラク軍高官だったというアブ・アリ・アンバリとアブ・ムスリム・アル・トゥルクマニが副官として戦争を仕切っている。そしてISのイラク、シリアの「各州」を12人の行政官の統治する文民官僚制度を敷いて支配している。ISの前身の2005年の20ヶ年構想によれば、宗派戦争は始まったばかりで、さらにこれから全面戦争を作ろうとするだろう。

こうした不寛容と暴慢なカリフ、バクダーディーには初代アル・バクルの演説にあった寛容と謙譲は見られない。カリフ制復興ではなく、全体主義の支配による時代錯誤をもたらすだろう。それはムスリム、スンナ派からも承認されることはない。だからこそシリア派との宗派戦争によって煽り、スンナ派の人々の絆を強める方法を一貫して採用してきた。カリフ制にアナロジーした権力斗争であり、征服と支配によって服従を強いる限りスンナ派からも見離されるだろう。しかし残念なことに、現在の欧米の空爆やシリア派・イラン革命防衛隊やシリア派民兵を主力とするイラク政府軍の「対IS」攻撃は、逆にISの力を拡大している。宗派戦争化しているために、世界各地からスンナ派の若者たちがISのジハードの呼びかけに義勇兵として駆けつけている。

シリアにおいても、ISと一時期武力対立までしたヌスラ戦線は、トルコの協力を得てさらに拡大し、ISと再び協力して2015年4月にはダマスカス南部のパレスチナ難民キャンプ、ヤルムークを制圧



したという。18万人の「パレスチナ人の街」だったヤルムークは、2012年2月ハマスがサウジアラビア、カタールの圧力に応じてシリア反体制派支持を表明して以降、政権支持のPFLP-GC(パレスチナ解放人民戦線・総司令部派)と反体制支持派の間で銃撃戦が起きるようになったという。シリア内戦の衝突で約1割の住民しか残っていなかったらしいが、ISの制圧下に入り、再びシリア政府と共同するパレスチナ解放勢力との戦いになっている。

ヌスラ戦線が勢力を広げたのは、ISと対立していた時もトルコ・カタールが支援し、国連決議による支援禁止後も武器・財政、トルコからの輸送ルートが確保されていたためであった。2015年4月には国連決議に配慮したのか、カタール、サウジアラビア、トルコはヌスラ戦線に対して、アルカーイダ系と関係を絶ち、アラブ諸国からの支援を公然とできるよう新しい組織に発展改名するよう求めている。アサド政権打倒のためにヌスラ戦線が不可欠な戦力だからである。

政治対話を促進させるべき外部介入のこうした動きが転換しない限り、内戦は拡大しつづけるだろう。ISとヌスラ戦線は不可分なのだから。

さらにISへの世界各地からの加入忠誠の増大を受けて、アルカーイダ本部のアイマン・ザワヒリ自身が身を引こうとしているという情報もある。世界各地のアルカーイダ支部に対して、「忠誠を解く」と告知しようとしているという。この情報は4月3日付で、アルカーイダ元メンバーの英諜報員アイマン・ディーンの話として伝えている。

2011年5月にパキスタンのアバタバードで米特殊部隊によってウサマ・ビン・ラーディンが殺されたのを受けて、アイマン・ザワヒリはリーダーとなった。知性とモラルの人と言われてきた。1987年



にウサマ・ビン・ラーディンがアイマン・ザワヒリらと共にアフガニスタンで結成したアルカーイダ潮流は、今や第一世代よりも軍事的に純化し、宗派戦争を通して「イスラームの楽園」を築こうとするISに一元化されていくのだろうか。

## 6 宗派戦争を越えて

### (1) 宗派戦争の拡大の現局面

宗派対立、宗派戦争で解決したり、片付けられるものはほとんどないと言ってよい。宗派戦争は、中東にある根本問題であるイスラエルの占領を覆い隠す役割を果たしている。宗派戦争は中東の根本的な包括的平和から目をそらせる。包括的平和とは、イスラエルがパレスチナ、シリア、レバノンを含むすべての占領地を返還すると同時に、アラブ諸国がイスラエルと国交を開くことによって、正常な隣国関係を築くこと。もちろん、パレスチナ人の「帰還の権利」「国境・エルサレム問題」も、そうした中で解決させるべきである。そしてまた、宗教が政治や権力斗争に利用されることで、反動的王制に対して、人々が階級的に目覚めて闘う道を閉ざす働きをしている。

「イラン・コントラ事件」にかかわったモサド高官の言葉を思い出す。(註「イラン・コントラ事件」とは、イラン・イラク戦争(1980-88年)中の1984年、CIA本部からペイルートに派遣されたウィリアム・バックレーが最高機密書類と共に拉致された。レーガン大統領とCIA本部はバックレー解放のため、イラン革命(1979年)時の米大使館占拠・人質事件で制裁中にもかかわらず、交戦中のイランが欲しがっている武器を秘密で売り渡し、その裏金で、ニカラグア政府転覆を狙う反共のコントラ勢力を資金支援した。拉致のバックにイランがいるとみて始まった計画である。)この時、シュルツ國務長官がイスラエル大使に協力要請して、モサドが武器引き渡しを担当。その中心的役割を演じたモサド高官は、「イスラエルは、イランとイラクが共に血の気を失うまで血を流し合い続けるのを喜んで眺めますよ」と語っている(『インテリジェンス 闇の戦争』)。これは今のイスラエルの立場でもあろう。

宗派戦争に利益を見出す者たちがいる限り、宗派戦争は拡大の一途をたどる。シーア派を最大の敵とし、またキリスト教や他の宗教を血祭りにあげて反欧米戦争のジハードとするIS、宗派戦争に介入して反アサド政権・反ヒズブッラーに自己の利益を見

出そうとするイスラエル、さらには米欧の軍需産業の戦争屋たち。今やアラブ・中東の権力者たちのスンナ派・シーア派の代理戦争は、国家権力間の抗争へとエスカレートしている。イスラームは世界各地に根付き、そのイスラームの多様性ゆえに16億という人々の信仰となった。宗派戦争はイスラームのもともっている多様性の中の唯一の神、文化伝統の多様性の歴史を消し去る行為である。

シーア派とスンナ派の対立や戦争は、預言者ムハンマドが死去して以降何度もくり返されてきた。しかし、現代になってこのように宗派戦争を激化させたのは、米軍のイラク侵略戦争という外的な力が作用し、地域バランスを破壊したからに他ならない。地政学的考察を無視した「ネオコン戦略」が招いた結果である。彼らは「意味深」にも逆にこうした宗派戦争を、イスラエルの利益として目論んでいたのかもしれない。

そして今では、イラクではかつてのイラン・イラク戦争の延長のように、イラン革命防衛隊が公然と加わって、イラクでIS掃討作戦を行っている。テイクリット地域を制圧すると、イラン革命防衛隊がかつてのイランにとっての「戦犯リスト」をもって拘束に乗り出したというニュースもあった。スンナ派住民のデマかもしれないが、確実に言えることは、スンナ派イラク住民は、イラク政府からますます離れるということであり、トランスナショナルなスンナ派世界に反シーア派感情を拡大させていく。そして、それはシーア派政権であるイランに対する恨みと脅威の声を増大させている。

イエメンにおいては、シーア派系の「フーシ派」(シーア派のザイド派。イエメン北部に過半数を占め、20世紀初頭にはイエメン王国を達成。イエメン革命を経てザイド派イマームの権力も崩れた。ザイド派の中の「シーア派」はフセイン・フーシをリーダーとしたグループだった。ザイド派の権利向上を求めてサレハ大統領時代に弾圧され、フーシはイランに亡命。戻っていた2004年、治安部隊に殺された。その後継者たち。「アラビア半島のアルカーイダ」と対決してきた)が、サレハ大統領崩壊後武力蜂起で権力を掌握する事態となった。これに対してサウジアラビアは、湾岸諸国、アラブ王制国家らと共同して、「フーシ派」に対し空爆掃討をはじめた。さらにイランの核問題をめぐる「六ヶ国協議合意」に対して、サウジアラビアやイスラエルは危機感をもって「合意阻止」にうごめいている。

2015年1月、米議会に証人として出席したキッシンジャーは、イランの核保有能力「阻止」からはじまった協議が、イランの核能力の「管理」に変化してきたことを指摘し、この交渉を進めるならば、中東における「核拡散」は避けられないと述べている。中東で唯一核兵器を独占するイスラエルは、「イラン合意」に反対する米共和党と共同して、「合意」をさせない「阻止」戦術を政治的、軍事的に準備している。サウジアラビアはイランのシーア派の「脅威」に対して、スンナ派盟主としていつでも核を持つ準備がある。パキスタンの核開発には巨額の資金を援助して共有してきたからである。6月「合意」期限に向けた動きは、宗派戦争を増大させている。

### (2) 中東のパラダイム転換を

現在の宗派戦争は過去の植民地支配、現在も続く米欧の介入と無縁ではない。「イスラエルの安全」と「石油利権」のために軍事的・政治的介入がくり返されている。戦乱の中東を根本的に解決する道は、まず過去から現在まで続いている不公正、米欧のダブルスタンダードを止めることである。そして何よりも「中東の非核非戦地帯化」に戦略を定めることである。もちろん米国からイスラエル、ISに至るまで、ものごとを軍事的に解決することに関心角度を向けている現状では当然無理である。しかしそうしない限り永続的に戦争紛争は続き、中東地域を越えて戦乱は深まらざるを得ない。

「中東の非核非戦地帯化」戦略に立つということは、その方向へ現実のあり方をまず一歩でも転換していくことであり、米国の政策変更を促し続けることだ。

第一に、中東の戦乱の歴史的原因となっている「イスラエル問題」をまず解決すべきである。「イスラエル問題」とはイスラエルのパレスチナ軍事占領問題である。この問題を公正に解決すること。まずイスラエルが国連決議に則って占領地を返還し、国際法違反の数々を正すよう米国を含む国際社会がイスラエルを統制することである。

第二に、イランの「核問題」と同様に、イスラエルの核の査察・管理が行われなければならない。2014年12月2日、国連総会は「イスラエルが核兵器を放棄して、中東を非核地帯とすること」を求める決議を行った。賛成161ヶ国、反対5ヶ国、棄権18ヶ国で可決している(日本は賛成。米・イスラエルは反対)。イスラエルの核保有は80発から500発とみられている。イランはイスラエルが核保有する限り核開発能力を維持しようと務めるだ



ろう。イスラエルの核廃棄は世界の圧倒的多数の要求であり、中東の安定への転換の鍵なのである。

第三に、戦略に沿って現実の問題に対処すべきである。まず空爆をはじめとする米国とその同盟国の軍事介入をやめること、さらにISをはじめとするすべての武装勢力への軍事支援、アクセスをストップし、逆に武器を回収させること。有料で回収するのは、これまでも紛争地で効果をもたらしている。武器の提供、財政支援、訓練場所提供して来たのは西欧、サウジアラビア、カタール、ヨルダン、トルコなどのスンナ派政権であった。同じ「湯水のような」財力で武器を買い取り回収し、地域の復旧や生活再建、産業にこそ力を入れるべきであろう。(かつて米情報機関も有料で武器買い取りをしたことがある。小規模なものだったが、アフガニスタンで対ソ連戦にCIAが訓練し提供した高性能武器の買い取りである。ウサマ・ビン・ラーディンのように反米に転ずる勢力が携帯用の対空ミサイル、ステイングァーを対イスラエル機狙いに使われると察知し、高値の買い取りを呼びかけていた。)中東の現在の混乱は、武器の氾濫が紛争をどんどん拡大させてきたのである。今こそ問題解決のパラダイムを転換すべきである。

第四に、「地域大国」によって、地域の問題を解決する道を拓くべきである。「地域大国」の首脳が話し合う場を定期化し、中東紛争に責任を負うべきであろう。なぜなら、紛争を水面下で作りだしたりしている当事者でもあるからである。これは追放された前エジプト大統領ムルシーが大統領時代に呼びかけ、機運が生まれていたことであった。サウジアラビア、イラン、トルコ、エジプトで地域の安定のために話し合いを始めることを呼びかけたものであった。今ますますその必要性は増大している。

第五に、シリア問題の解決に向けた新しい枠組の



形成である。シリア問題への介入と宗派戦争化がISを育ててきたし、イスラ戦線を育ててきた。アサド政権を排除して、それを前提に新しい暫定政府から新しいシリアを作るという西側の強力な介入は、今やイラクの二の舞に至っている。ISと米軍の戦争が作用し、ブレナン米CIA長官は、ISなどイスラーム過激派に活動の場を与えることになるようなシリア政府の衰退を米国は望まないと、2015年3月、米外交問題評議会で発言している。「ロシアも米国も有志連合も中東諸国も誰もダマスカスの政府とその政治機構の衰退を望んでいない」と述べている。

まず現在の「ジュネーブ2会議」の「アサド排除」を前提とするシリア再建という「合意」から、出発点を変更するべきであろう。大事なことは国民の意志を問える条件をつくることであり、誰を国の指導者とするかは、外部勢力が決めることではない。シリア国民が決定することなのだから。

さらに言えば、第六に、各国の選挙を「尊重する監視」を国際社会は貫くべきである。エジプトの教訓であり、90年代のアルジェリアの教訓でもある。各国の民主選挙によってどのような政権が生まれても、外部から介入したり暴力で制圧しない原則をうちたてること。選挙の自然成長性は、当初は西側にとって気に入らない勢力が政権を担当するかもしれない。「アラブの春」で命がけで立ち上がった民衆蜂起は、クーデターによって窒息させられ、数百人が死刑判決に晒されている。その分、正義や大義に立ち上がった若者たちは失望し、ISのように闘うしか解決の道はないと思い定めても不思議ではない。

今こそ外部勢力も当事者もこぞってパラダイム転換を決断すべきではないだろうか。過去の植民地支配を反省し、公正な関係を中東諸国と結ぶことがまず米欧政府に求められる。欧州はすでに17世紀のウエストファリア条約に至った教訓があるではないか。

親米であれ、非米であれ、反米であれ、公正な関係を結ぶことによって新しい世代の教育も社会関係も国際関係も育つだろう。大国が「非核非戦地帯化」に向けて真面目な戦略行程表を作り実行する中で、政治的枠組を明確にしていく必要がある。そして人々が、宗派ごとにISに依存しなくても暮らして行け、暴力支配を内から解体していくような道こそ、これから進むべきだ。それは今の「対IS有志連合」もISのやり方も否定し、宗派戦争を止揚していく道である。

日本は、こうした中東の占領、植民地支配と直接かかわって来なかった。その分、違った役割を果たすことができる。米・イスラエルとの同盟を誇示するような1月の安倍訪問時の振る舞いは、安倍首相の好きな言葉であるが、「国益」を損なう。むしろ「国是」である「9条平和外交」によって「非核非戦地帯化」を戦略とし、米政府の補完や軍事的な役割などの余計なことをせず、難民や地域復興などの経済的支援や避難民を大幅に日本に受け入れることが、重要な貢献であると私は思う。

そのためには、日本自身が、国連からも指摘されているように、「ヘイトスピーチ」問題などをきちんと解決し、「人権大国」となる自身の変革が同時に問われている。(2015年4月28日脱稿)

## 後記

月日の経つのが今年はことのほか早かったように思います。安保法制への闘いや凄まじい暑さに音をあげていた夏があっさりと去って、身のまわりを忙しくさせて、秋はあっという間に駆け抜けてゆきました。日本に秋という季節がなくなってしまったかとさえ思いました。夏の間中クリーニング屋さんで預けっぱなしにしていた炬燵布団を、恥じながらやっと受け取り、もう冬支度です。そんな中で、ちょっぴり心安らいだのは、スーパームーンとやらを見上げてぼんやりとひと時を過ごした時でした。世の中、世界中で騒がしいこの頃ですが、赤みがかった大きめの月を見上げていると、なぜかいいことがありそうなイメージを感じられたからかもしれません。

といいながら、わが編集室はわずかな高齢者グループで、力不足。いろいろと紆余曲折を経て、思い切って隔月間を季刊に変えることにしました。楽しみにしてくださっている読者には申し訳ありませんが、どうぞご理解下さい。次号は来年の2月に発行します。作業を手伝おうという若い人は居ませんか？力を合わせて新しい道を開けたらとても嬉しいです。皆様良いお年を！(Y)

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

## 「正誤」表

### 第 132 号

- |                                  |  |
|----------------------------------|--|
| ①2P(短歌))6行目                      | <u>臨海</u> を越え→ <u>臨界</u> を超え                   |
| ②3P(9/11)右上から7行～8行目              | 「 <u>犯罪・司法</u> 」に→「 <u>犯罪</u> 」として <u>司法</u> に |
| ③4P(9/13)右下から6行目                 | 激しい <u>民族的対立</u> →激しい <u>対立</u>                |
| ④8P(10/1)右上から19行目                | <u>信賴</u> → <u>信任</u>                          |
| ⑤9P(10/2)左上から12行目                | <u>勝った</u> → <u>買った</u>                        |
| ⑥11P(10/21)右下から5行目               | <u>エタニヤフ</u> → <u>ネタニヤフ</u>                    |
| ⑦12P(10/22)左上から12行目              | チョコ <u>味封</u> →チョコ <u>味風</u> を                 |
| ⑧13P右 10行目                       | <u>例に</u> → <u>側に</u>                          |
| ⑨13P写真と 15Pの <u>写真(本の写真)</u> が反対 |  |
| ⑩14P左下から16行目                     | <u>CITIES</u> → <u>CITIZEN</u>                 |
| ⑪14P右下から24行目                     | <u>昼間孝</u> → <u>昼間たかし</u>                      |
| ⑫14P右下から18行目                     | <u>ルポルタージュ人間</u> → <u>ルポルタージュ・人間</u>           |
| ⑬15P左下から10行目                     | 退却 <u>せる</u> 」→退却 <u>せよ</u> 」                  |
| ⑭16P左下から20行目                     | <u>いくつ物</u> → <u>いくつもの</u>                     |
| ⑮16P左下から16行目                     | <u>イマンデあり</u> → <u>イマンであり</u>                  |
| ⑯16P右上から3行目                      | 作ってしまったのが <u>いい</u> →作ってしまったのか。」               |
| ⑰16P右上から11行目                     | ～ <u>れている怖い</u> → <u>れている。怖い</u>               |
| ⑱20P右下から1行～2行目                   | ～を <u>執ると</u> 、→～を <u>執ると</u>                  |